

参加型実習と共用試験の関係の整理・確認

参加型実習は獣医事審議会計画部会の答申、パブコメ後、農水省の省令で実行可能になります。そこで、参加型実習の違法性阻却条件のうち、クリアーできるものから順次実行するという戦略になります。当分の間、変則的にならざるを得ないと思います（できればロードマップが必要です）。

参加型実習に必要な事項として

1. 畜主に対して参加型実習である旨の説明と同意を得る。
 2. 同意を得るための説明として、各大学における臨床実習の指針の作成と水準の説明
(いずれ、各大学の指針を標準化する作業が必要になる、また、コアカリキュラムの参加型実習内容との調整が必要になる。)
 3. 学外を含めた指導教員の資質、施設の保証。学外の場合は委託費用等についても検討しなければならない。(いずれ、各大学の指針を標準化する作業が必要になる)
 4. 事前の獣医学生の評価
- 最初に学生に対する参加型実習の説明と簡単なオスキー型での態度・能力評価が必要になりそうに思います（無事に実習を遂行するための、予防措置？）
(各大学の独自評価から、いずれ、共通評価基準、共用試験へと推移する)。
これらを踏まえ、共用試験の準備委員会を立ち上げる。もちろん、共用試験は参加型実習の 1 つの要素ではあるが、学生の質の保証だけでなく、同時に、コアカリキュラムの有効性、大学の第三者評価、教育の質の保証等にも有用である。

獣医学全国協議会の合意としては、

- ① コアカリ委員会が講義科目の調整と実習科目の作成を進める。
- ② 参加型実習に関しては各大学で指針を作成し、コアカリ委員会の下に参加型実習に関する指針の調整及び実施の課題解決のためのWGをおく。
- ③ 共用試験に関しては調査委員会の答申を受けて、課題解決のための準備委員会を発足する、ということであったと思います。

「共用試験準備委員会」の検討項目について（叩き台）

目的

「獣医学共用試験調査委員会」では、獣医学教育改革の為には見学型から参加型実習導入が不可避であり、実践的実習に入る段階の学生の質を一定水準に確保することを目的としての事前評価システム（獣医学共用試験）の導入の検討が必要との結論に達した。この答申を踏まえ、具体的な問題点と課題を整理し、全国 16 大学で導入することを見据えた制度面およびシステム面についての具体的な検討を行う。

共用試験のポイント

- レベル設定
- 標準化作業の手順
- 共用試験が測定すべき内容

1. 全教員への意識調査（アンケート）：啓蒙活動の一環ともなる

- 1) 臨床実習に入る前に備えるべき必要最小限度の知識・能力・態度は何か？
基礎獣医学、臨床獣医学の知識と技術、獣医師としての社会的役割と責務に関する知識
獣医師としての人格、コミュニケーション・問題解決、グループワーク、責任能力
誠実さ、信頼性、説明と同意（T P C の関係理解）、倫理性
- 2) 知識・能力を保有しているかを問う試験としてコンピュータ(CBT)の必要性はあるか？ 紙ベースもありか？
- 3) CBT を実施する場合、試験内容、試験方法、実施時期、試験問題の作成方法等についてアンケート調査を実施

2. モニター試験による CBT の開発

- 1) アンケート調査の分析後：CBT 問題を 2000 問作り、モニター試験を数校で実施

- 2) モニター試験結果の分析：設問の識別力・困難度の推定
- 3) 項目内容、識別力・困難度の情報をもとに「獣医大学共用試験(VetCBT)」を開発する。
- 4) 今回は知識試験 (VetCBT) のみの開発で、実技試験 (VetOSCE) は今後の課題とする？工夫次第ですが、参加型実習を無事に遂行するには、OSCEは必要になると思います。(どのような形式であれ)。

3. 具体的な調査項目

- 1) 共用試験の必要性の有無、実施のメリット・デメリット、共用試験実施までに検討すべき課題
- 2) 共用試験において学生のどのような知識・能力・態度を計るか（論理的思考力、発想力、持続力、コミュニケーション力、数理的能力、読解力等）
- 3) 共用試験を実施する場合、各専門分野における科目選定（基礎系獣医学、応用系獣医学、臨床系獣医学、生命倫理、獣医倫理、関連法規等）
- 4) 共用試験の出題方法（選択肢数、写真、図を用いるか）、問題数、時間数、問題の難易度
- 5) 共用試験の実施時期
- 6) 共用試験の結果を進級にどのように反映させるか
- 7) 問題作成方法
- 8) 作成された問題の管理法、データベース作成の必要性

4. モニター試験の実施と統計的分析

- 1) 試験解答について因子分析、項目反応理論の適用により、識別力、困難度を算出し、項目特性曲線、情報量曲線を描く。
- 2) 各被験者の平均正解率、各項目の正答率と各被験者の正答率の平均値との相関係数を推定する。
- 3) 項目反応理論により各回答者の能力の推定値を算出する。
- 4) この推定値を領域別、学年別、大学別に算出する。
- 5) これらの結果を基に、VetCBT 運営の為のシステムを開発する。

5. CBT 運用のためのシステム開発：

モニター試験と並列に、CBT を実施するためのハードウェア、ソフトウェアの開発を行う。

- 1) ネットワーク経由で他施設の受験者情報を処理するための高セキュリティ、高信頼性のサーバ環境の構築
- 2) CBT 問題を管理・分析するためのデータベースシステム
- 3) CBT において直接受験者とのインターフェースとなる出題および評価システム

6. VetCBT 試験の実施と分析

- 1) モニター校を選定し、数校において CBT を実施し、その結果を分析する。
- 2) 報告書として纏める。
7. 共用試験導入までの概要をロードマップとして示す。

今後のロードマップとスピードは？

医学薬学コアカリ制定から共用試験まで 4-6 年で実現

年度	機関としての対応	各大学の対応
22	農水省報告書（通知） 空白期間におけるガイドライン作成 共用試験準備委員会立ち上げ	大学独自で実施する違法性阻却に向けたガイドライン作成
23	コアカリ講義科目制定 共用試験準備委員会立ち上げ(事業として) 相互評価案の策定	
24	共用試験準備委員会報告書 相互評価の開始	コアカリ準拠のカリキュラム改正
25	試験問題作成の開始 実施機構の設立準備	対象となる入学生 1年次
26		2年次
27	共用試験試行	3年次
28	共用試験本格運用	4年次